

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

授業担当者

所属/職名:法文/教授

氏 名:尾崎孝宏

授業科目名	文化人類学実習
研修先(国・地域) 滞在地	韓国全北大学校(韓国全羅北道全州市)
研修期間	2017年8月25日~8月30日
<p>〔研修の成果〕</p> <p>本研修の目的に即して成果を挙げると以下ようになる。</p> <p>1.韓国における異文化体験を通じて、自身の持つ文化的バイアスを自覚する。</p> <p>本年度は前年度までになく事前の調査計画のブラッシュアップを入念に行かせたのだが、調査計画の一部に日本的な文化的バイアスが介在してしまう点は、質的調査の初心者としてはやむを得ないことであった。ただし、本年度は調査計画が練られていたこともあり、調査計画にに残っていた日本的な文化的バイアスは現地調査の比較的早い段階で参加学生が自覚し、完全とは言えないまでも適宜調査計画を修正することで社会調査実習を円滑に進めるとともに、無意識に介在する文化的バイアスを強く自覚することができた。また、こうした経験を通じて自文化を相対化する必要性も自覚することができたと思われる。</p> <p>2鹿児島大学の学生と全北大学校の学生が協力して、初歩的な社会調査を体験する</p> <p>今回の社会調査実習では、現地の調査活動については基本的に教員はタッチせず、両校の学生の自主性に任せて現地調査を行かせた。昨年度より、ホスト側の大学生にとってはホームとなる場所(今回の実習であれば全州)に絞って社会調査実習を実施することにより、学生が自主的に行動できる余地が拡大したとともに、費用対効果の面でも大幅に改善することができた。今後、今回の経験をモデルとしてテキスト化する計画があり、次回2018年1月に全北大学校の学生が来鹿して社会調査実習を行う際には、テキストの有効性を検証し、その結果を報告・討論するためのシンポジウムを鹿児島で開催する予定で、これによって地域貢献を目指している。</p> <p>※完全に本題とは外れますが、この「紙エクセル」形式の表は来年度以降見直してもらえると嬉しいです。</p>	
<p>〔今後の課題〕</p> <p>本プログラムは、基本的に鹿児島大学の学生が韓国に行って全北大学校の学生と合同で社会調査を行うという枠組みで10年以上継続しており、大きな成果を挙げているとともに年々成果が向上している。研修の円滑な実施のためには外部資金等による経済的援助が得られた方が望ましいが、近年の補助金の傾向として短期(1-2年程度)の資金を次々と探して獲得する必要に迫られている。むろん補助金は毎年獲得できるものではないので、本事業のような学内での措置が長く続くことを祈ってやまない。</p>	